

日本語学会 第171回大会 学会報告

小林 颯（東京外国語大学 博士後期課程）

報告内容

1. 第171回大会の概要

2. 発表内容のご紹介

2.1. 水野 庄吾 (G-3)

「相対的場所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」

2.2. 坂本 遊野 (E-4)

「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」

3. 次回（第172回）の言語学会

1. 第171回大会の概要

- 期日：2025年11月22日（土）・23日（日）
- 会場：岡山大学津島キャンパス

◆ 第1日

- ・口頭発表： 33件
- ・ポスター発表： 29件

◆ 第2日

- ・ワークショップ： 6件
- ・公開シンポジウム： 「アジアの諸言語の「ナル」と「ナル的」表現」

2. 発表内容のご紹介

2.1. 水野 庄吾 (G-3)

「相対的場所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」

2.2. 坂本 遊野 (E-4)

「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」

2. 発表内容のご紹介

2.1. 水野 庄吾 (G-3)

「相対的場所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」

発表資料：<https://researchmap.jp/shogomizuno/presentations/51474270>

2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【要旨】

- ・ 相対的场所に含まれる 5 つの位置にみられる共起関係を探る
- ・ 相対的场所表現の共起関係をもとに意味地図を示す
 - 結果, 次の 2 点が明らかになった
 - [1] 相対的场所表現には 7 通りの共起関係がみられる
 - [2] 「後と下」の共起関係は他の 6 通りよりよくみられる

2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【背景知識】

- ・ 相対的场所 (Axial configurations)

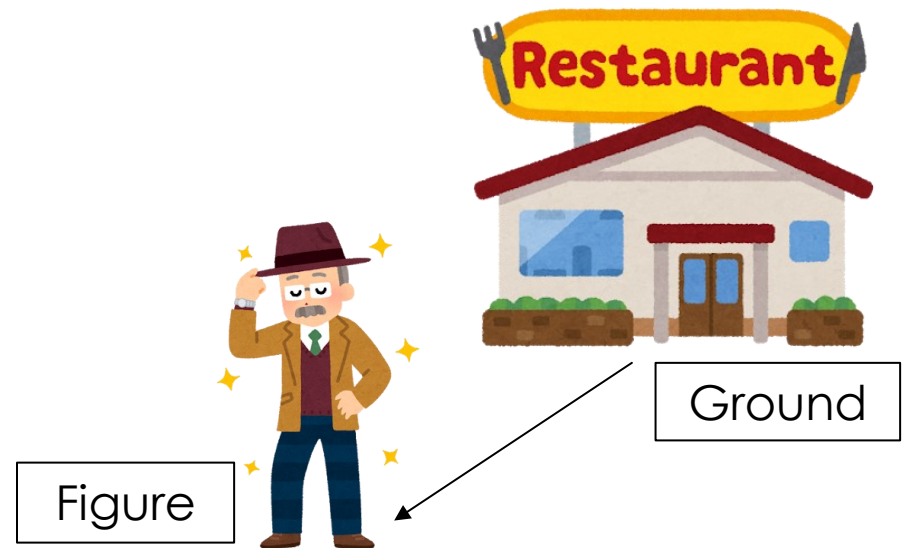
→ FigureがGroundに対して軸方向に分離した位置

(1) English

The man is in front of the restaurant.

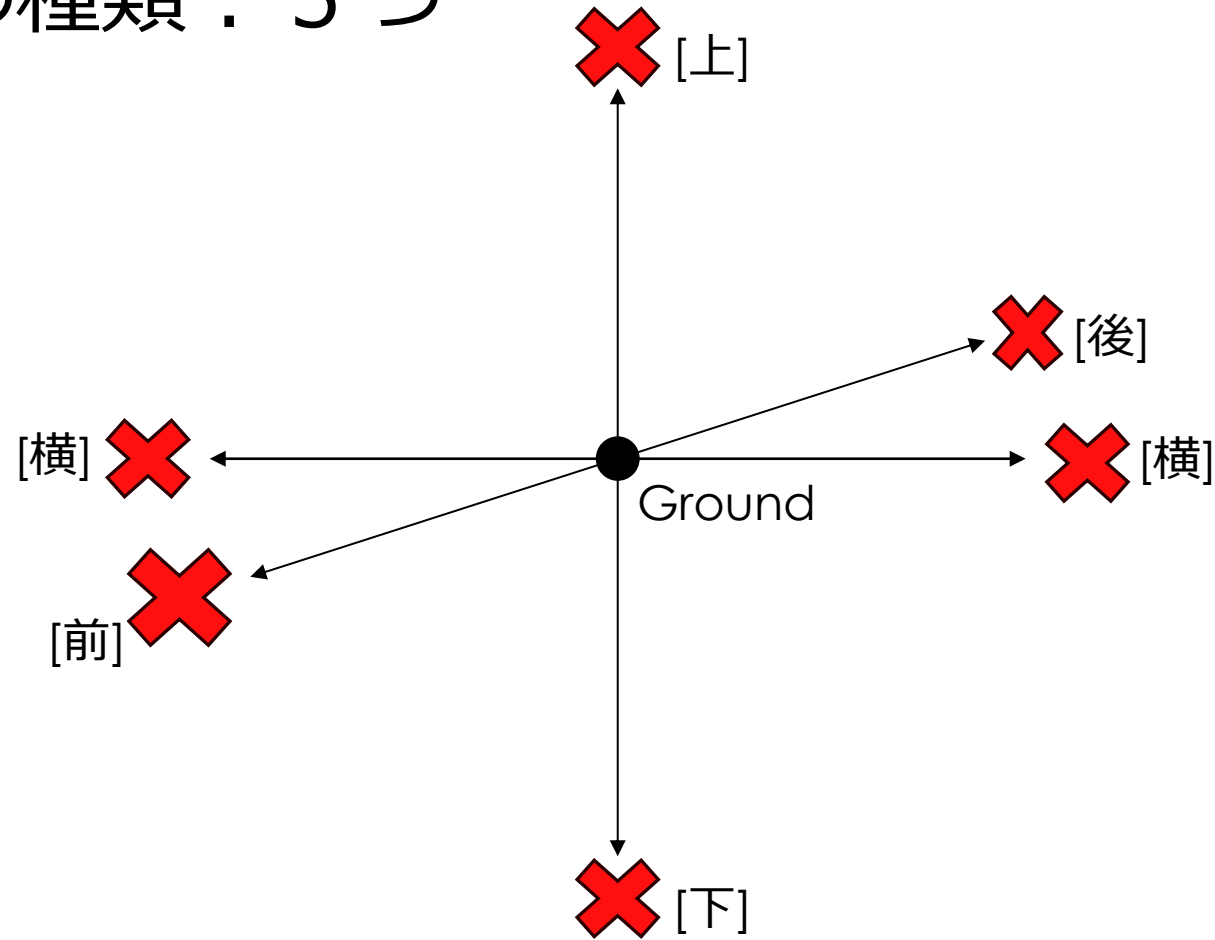
Figure

Ground



2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

- 相対的场所の種類：5つ



2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【目的】

- 研究課題：

相対的场所の5つの位置関係には（通言語的に）どのような

共起関係（coexpression）が見つかるのか？

Coexpression (Haspelmath 2023: 2; Hartmann et al. 2014)
one minimal shapes has two different meanings in two different situations

	[+接触] 上	[-接触] 上
英語	<i>on the table</i>	<i>above the table</i>
日本語	テーブルの上に	

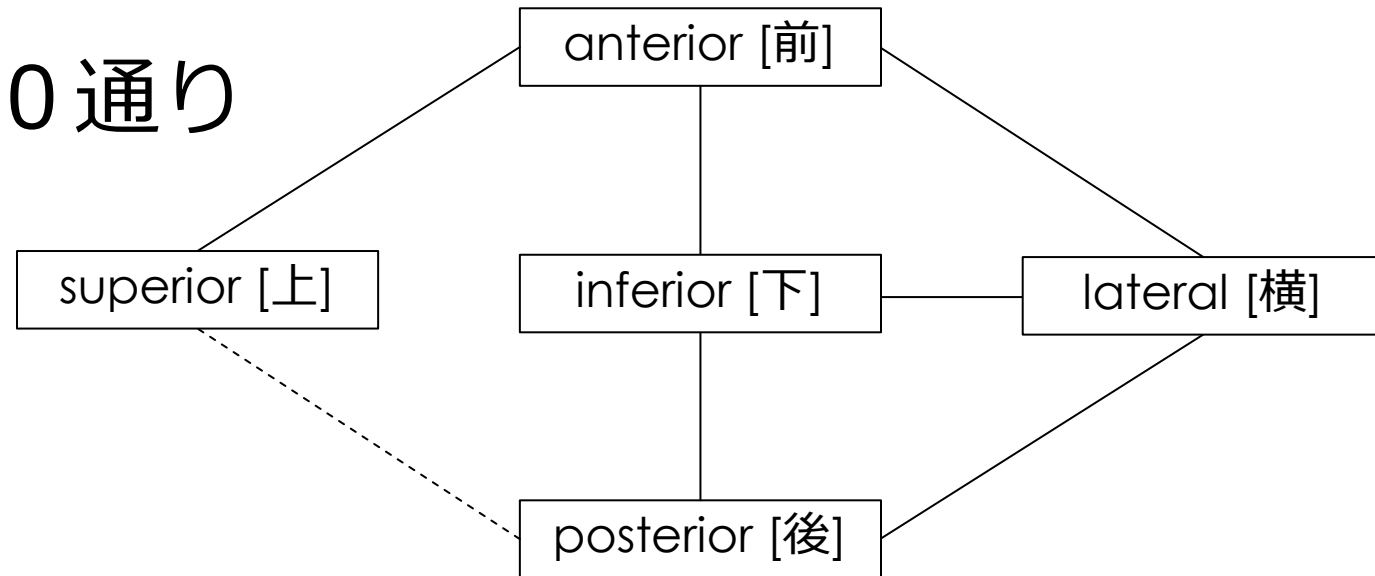
2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【議論】

- 相対的场所表現の共起関係：

論理的に発生可能なのは10通り

→ 実際は7通り

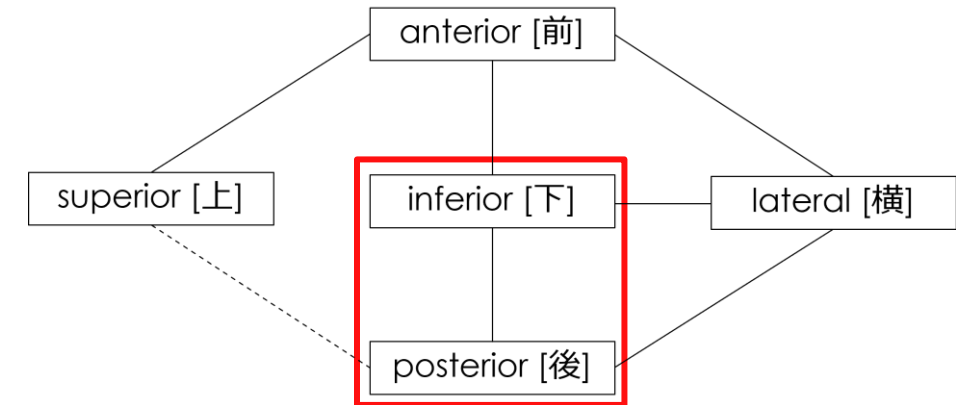


2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（下一後）

(2) Fur (Waag 2010: 320; 76)

<i>burɔ</i>	<i>sîsî=ŋ̃</i>	<i>kəríŋ</i>
tree	sisi=GEN	under/behind.LOC
‘under/behind the Sisi tree’		



このパターンは他の言語でも確認される：Lumun (Smits 2017: 603), Xinka (Sachse 2010: 338), Moskona (Gravelle 2010: 87), San Dionisio del Mar Huave (Salminen 2017; 72), Dom (Tida 2006: 48)

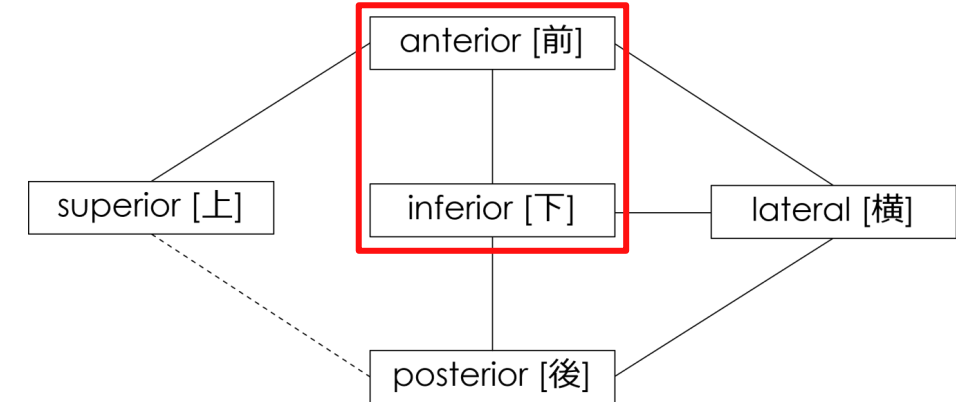
2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（前一下）

(3) Haida (Enrico 2003: 628; 35)

a. *n-ee* *xid-gu*
house-DEF in.front.of-LOC
‘in front of the house’

b. *n-aay* *xid-gu*
house-DEF under-LOC
‘under the house’

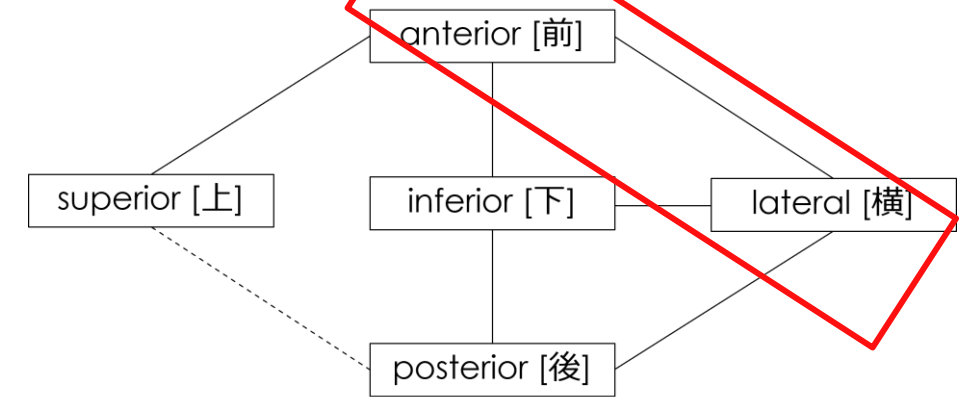


2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（前一横）

(4) Senhaja Berber (Gutova 2021: 500)

stat (n) *uḥam*
in.front/beside (of) house
‘in front of/side the house’



(5) Hup (Epps 2008: 468)

cá? *hipó?*
box in_front
‘in front of the box’

←*hipó?* が遠い「横」も表す (Epps 2008: 466)

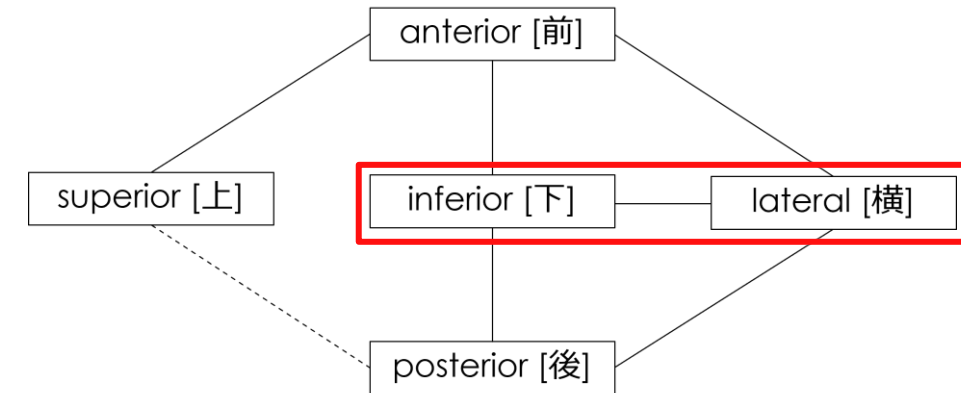
2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（下一横）

(6) Tommo So (McPherson 2013: 229; 231)

a. *dúú'* *ṁmɔ=nɛ*
beside 1SG.POSS=OBL
'beside me'

b. *tòndòón* *dùù^L=nɛ=wɔ*
water_jar bottom=OBL=be
'under the water jar'



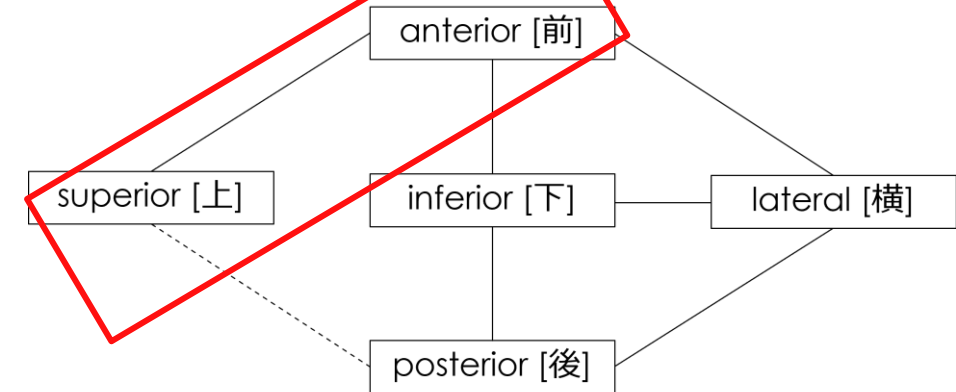
2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（前一上）

(7) Tlacolula Valley Zapotec (Lillehaugen 2003)

a. *Zuugwa'ah* *mìi'iny* *loh*
NEU.stand child in.front.
The child is standing in front of the car. [...]

b. *Fo'c* *nàall* *loh* *n*
lamp NEU.hang above table
'The lamp is above the table.'



2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（横一後）

(8) Paunaka (Terhart 2024: 286; 729)

a. *chÿ-ekene* *nuinekÿ*

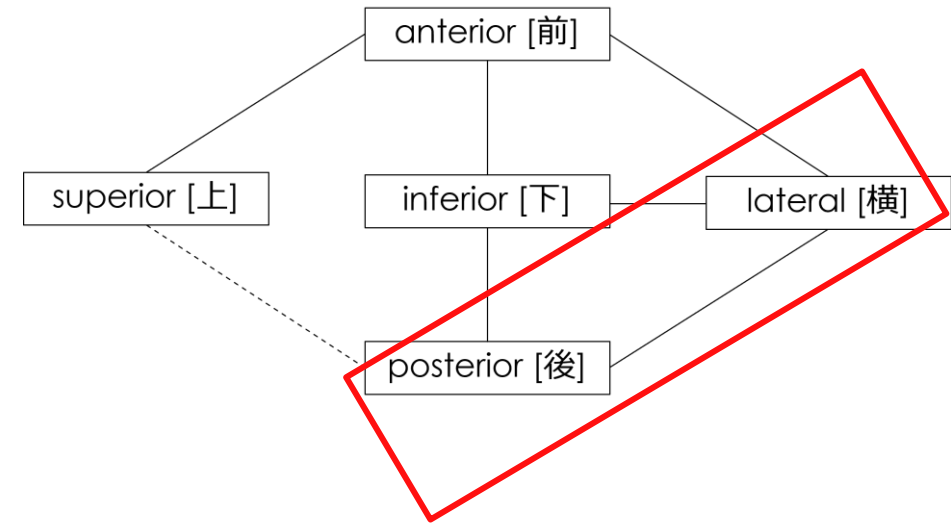
3POSS-non.vis.side door

‘behind the door’

b. *punachÿ* *chÿ-akene-chÿu*

other 3POSS-non.vis.side-DEM

‘on the other side of the pond’



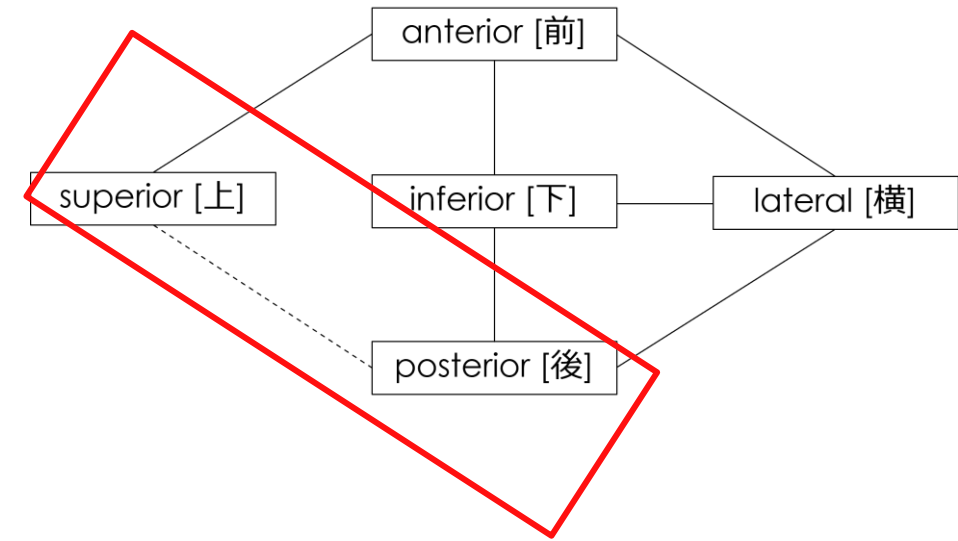
kurichi
pond

2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

・相対的场所表現の共起関係（上一後）

(9) Moskona (Gravelle 2010: 135)

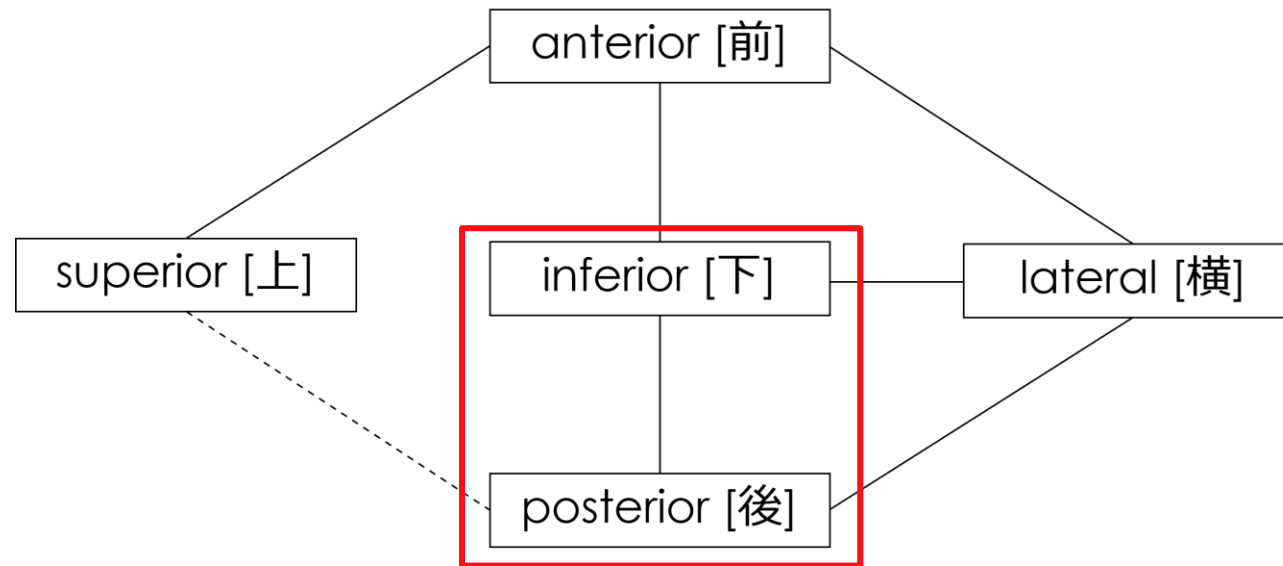
jig *mod* *ejmeg*
LOC house behind
'behind the house'



2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

- ・この意味地図に対する説明：

「後一下」の共起関係においては他の6通りよりよく確認され、意味的類似性を反映していると考え得る



2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【結論】

- [1] 相対的场所に含まれる5つの位置は、論理的に発生可能な10通りのうち7通りが発生する
- [2] 「後と下」の共起関係は他の6通りよりよく確認され、意味的類似性を反映している考え得る

2.1.「相対的场所表現における意味と形式のマッピング：意味地図を用いて」(水野)

【質疑など】 (一部抜粋)

- 「後一下」の意味的類似性を貫く一般性は何か
 - “invisible” な場所だからではないか
 - ⇔ (8) は “non visible side” で表すのは「横一後」
- 「前一後」などが共起しないのは身体性が影響しているのではないか
- 参照文法の粒度によって変わるのではないか
 - 140言語みているので記述の粒度も均せるのではないか

2. 発表内容のご紹介

2.2. 坂本 遊野 (E-4)

「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【要旨】

- ・ ヴェーダ語における祭式動詞は多様な格交替を見せる
- ・ 祭式動詞の格支配を体系的に記述するとともに，祭式動詞間の格交替の違いの要因を明らかにする
 - 結果，次の2点が明らかになった
 - [1] 祭式フレームを設定することで4つの格配列を特定
 - [2] 動詞における役割の相対頻度によって副次的にどの役割が対格になりうるかが決まり，それによって格交替の可能性が決まる

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【背景知識】

- ・ 印欧語族 > インド・イラン語派 > インド・アーリヤ語群 > ヴェーダ語 (Vedic Sanskrit)
- ・ 推定14C-5C BCE, インド北西部
- ・ 宗教文献であるヴェーダ文献において口伝で継承される
- ・ 語順は比較的自由, 項の省略は多い
- ・ 項の統語的実現は、名詞につく格語尾と定動詞の人称語尾による

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【目的】

- [1] 祭式動詞の格支配を体系的に記述する
- [2] 祭式動詞の格交替の違いの要因を明らかにする

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

・ 扱う祭式動詞

- *īḍ* M “praise”, JB “reverently invoke”
 - *hvā* M “call”, JB “invoke, call (upon)”¹
 - *dāś* M “make offering”, JB “piously serve”
 - *vidh* M “worship”, JB “do honor”
 - *sapary* M “honour”, JB “serve”
-
- M = Macdonell (1916), JB = Jamison & Brereton (2014)
 - *hvā*は現在語幹*hváya-*のみを含む (Lubotsky 1997に従い、*hū*と区別)

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【方法】

- ・ 祭式フレームを導入

祭式動詞に共通する一般化された場面（後述）

- ・ リグ・ヴェーダを対象に定量的に調査

- 最古のヴェーダ 1500 BCE- (Witzel 1995: 98)

手順：1. Lubotsky (1997) を用い，祭式動詞を定動詞として含む節を特定

2. 節内で4つの役割（人間・供物・神格・報酬）を特定

3. その役割がどの格で表現されているか（／いないか）を記録

4. 格のパターン毎に集計

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

- ・祭式フレーム：

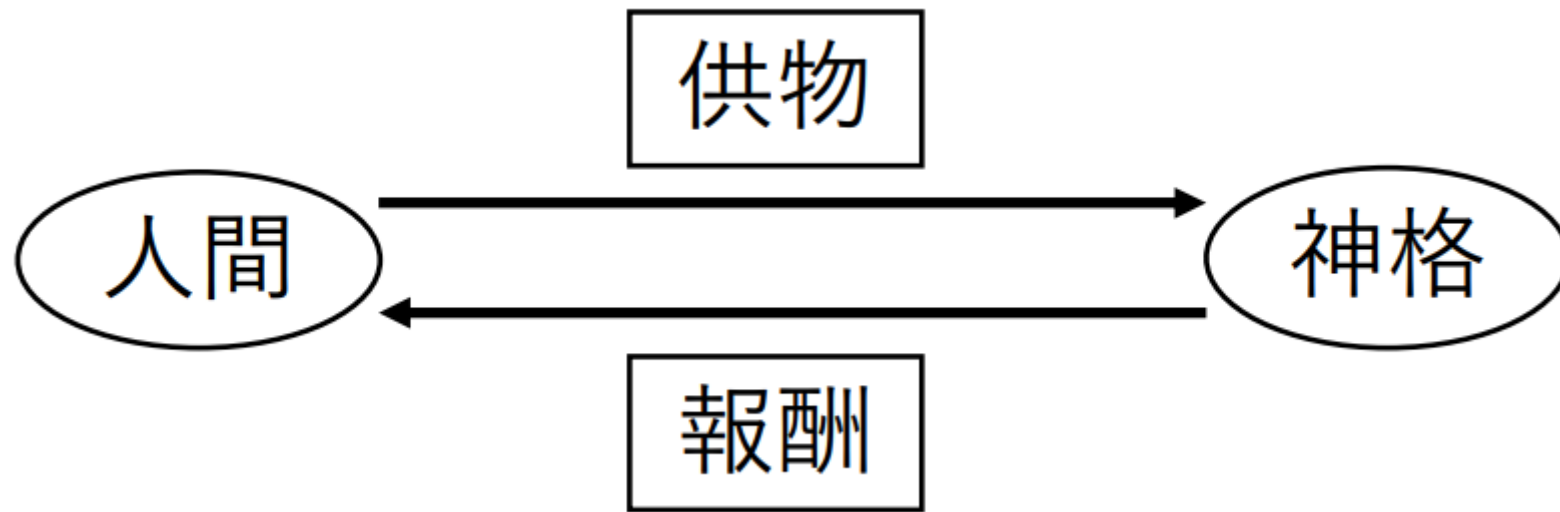
- ・祭式動詞に直接支配される名詞の大部分は次の4つ：

- 〈人間〉 崇拝者
- 〈供物〉 〈人間〉が〈神格〉を喜ばせるために捧げるもの
- 〈神格〉 崇拝を受ける者
- 〈報酬〉 見返りとして〈人間〉が〈神格〉に求めるもの・行為

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

- ・ 祭式フレーム：

「〈人間〉が〈供物〉によって〈神格〉に接待し, 見返りとして〈報酬〉を得ようとする」



2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【結果】

- 格配列は次の4通り

	〈人間〉	〈供物〉	〈神格〉	〈報酬〉
[無対格型]	主格	具格	与格	与格
[〈供物〉型]	主格	対格	与格	与格
[〈神格〉型]	主格	具格	対格	与格
[〈報酬〉型]	主格	具格	対格	対格

- 常に主格である〈人間〉以外は、対格で実現されうる
- どの役割が対格になれるかによって格配列が決まる

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

- 動詞が格配列を取る頻度

	<i>īḍ</i>	<i>hvā</i>	<i>dāś</i>	<i>vidh</i>	<i>sapary</i>
[無対格型]	0	0	50	28	0
[〈供物〉型]	1	0	6	7	2
[〈神格〉型]	69	45	2	1	30
[〈報酬〉型]	12	1	0	0	0

- 主要な格配列は[無対格型]か[〈神格〉型]
- 副次的に[〈供物〉型]や[〈報酬〉型]を取り得る

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

・ 相対頻度を調査

相対頻度 = 動詞において格役割が表現される頻度 ÷ 動詞の頻度

	<i>īḍ</i>	<i>hvā</i>	<i>dāś</i>	<i>vidh</i>	<i>sapary</i>
〈人間〉	91%	100%	90%	97%	100%
〈供物〉	27%	13%	47%	69%	44%
〈神格〉	89%	93%	85%	92%	94%
〈報酬〉	35%	28%	14%	3%	0%

80–100%	高頻度
20–80%	中頻度
0–20%	低頻度

- 高頻度はどの動詞でも〈人間〉と〈神格〉のみ
- 高頻度でない〈供物〉と〈報酬〉の頻度では動詞ごとの個性がでる

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

・役割の相対頻度と格配列の関係

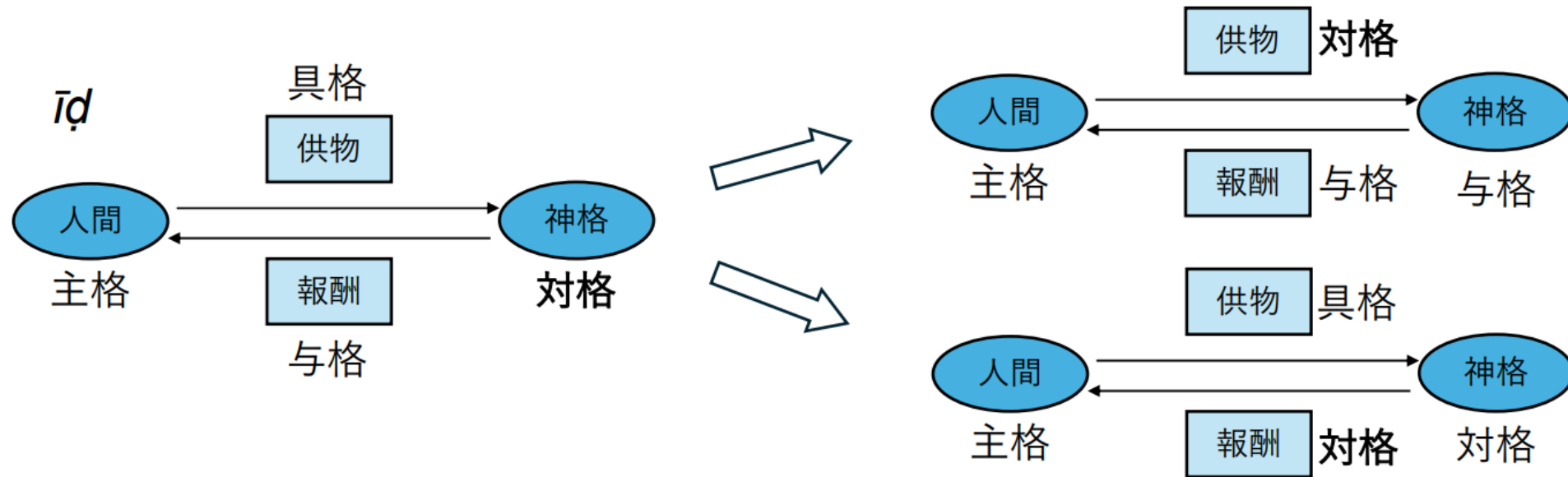
- ・〈供物〉が低頻度な*hvā*は〔〈供物〉型〕を取らない
- ・〈報酬〉が低頻度な*dāś*, *vidh*, *sapary*は〔〈報酬〉型〕を取らない

→ (対格以外も含めて) 低頻度な役割は、対格で実現できない

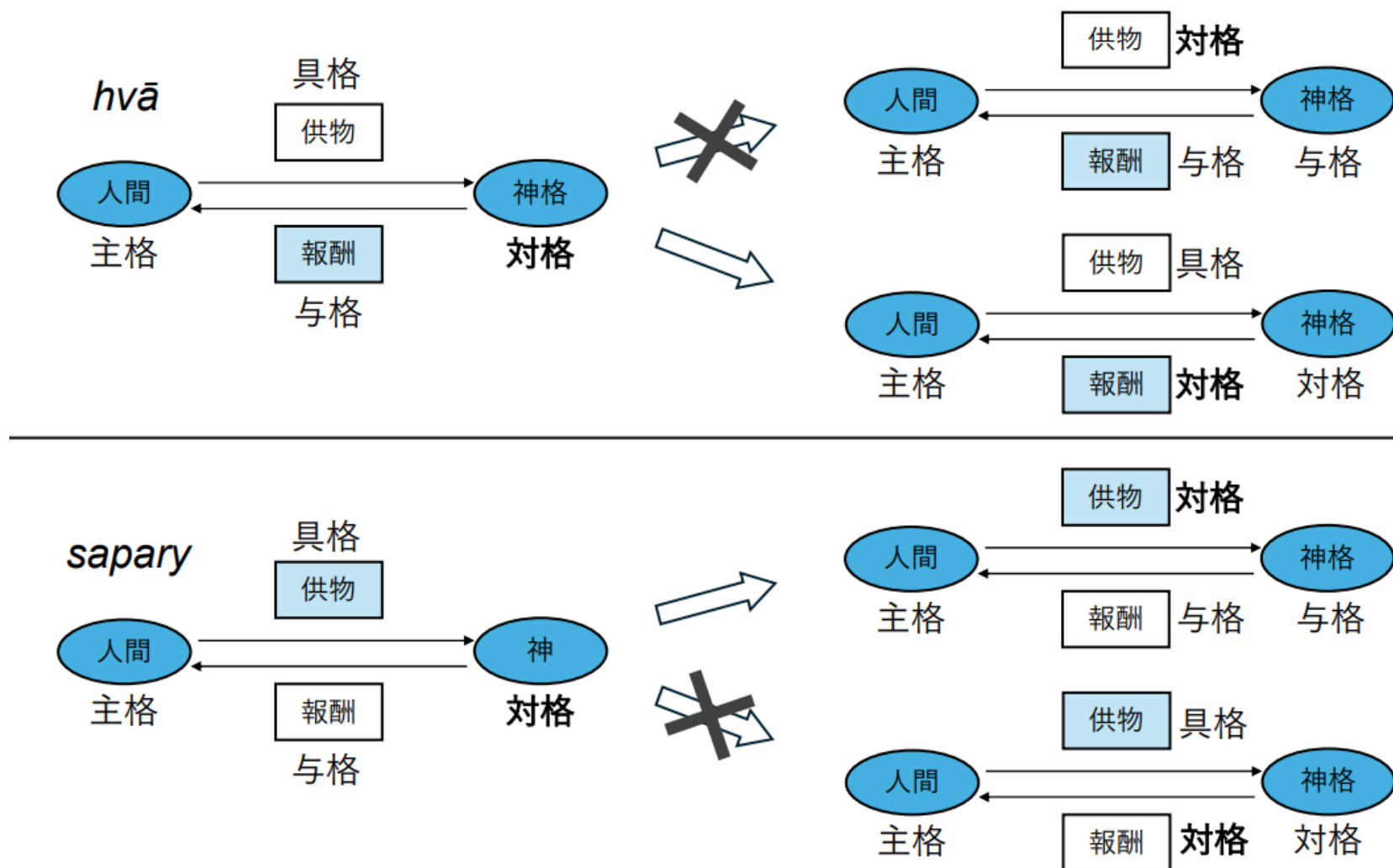
	<i>īd</i>	<i>hvā</i>	<i>dāś</i>	<i>vidh</i>	<i>sapary</i>	
〈供物〉	△	×	○	○	○	〔〈供物〉型〕
〈神格〉	◎	◎	○	△	◎	〔〈神格〉型〕
〈報酬〉	○	△	×	×	×	〔〈報酬〉型〕

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

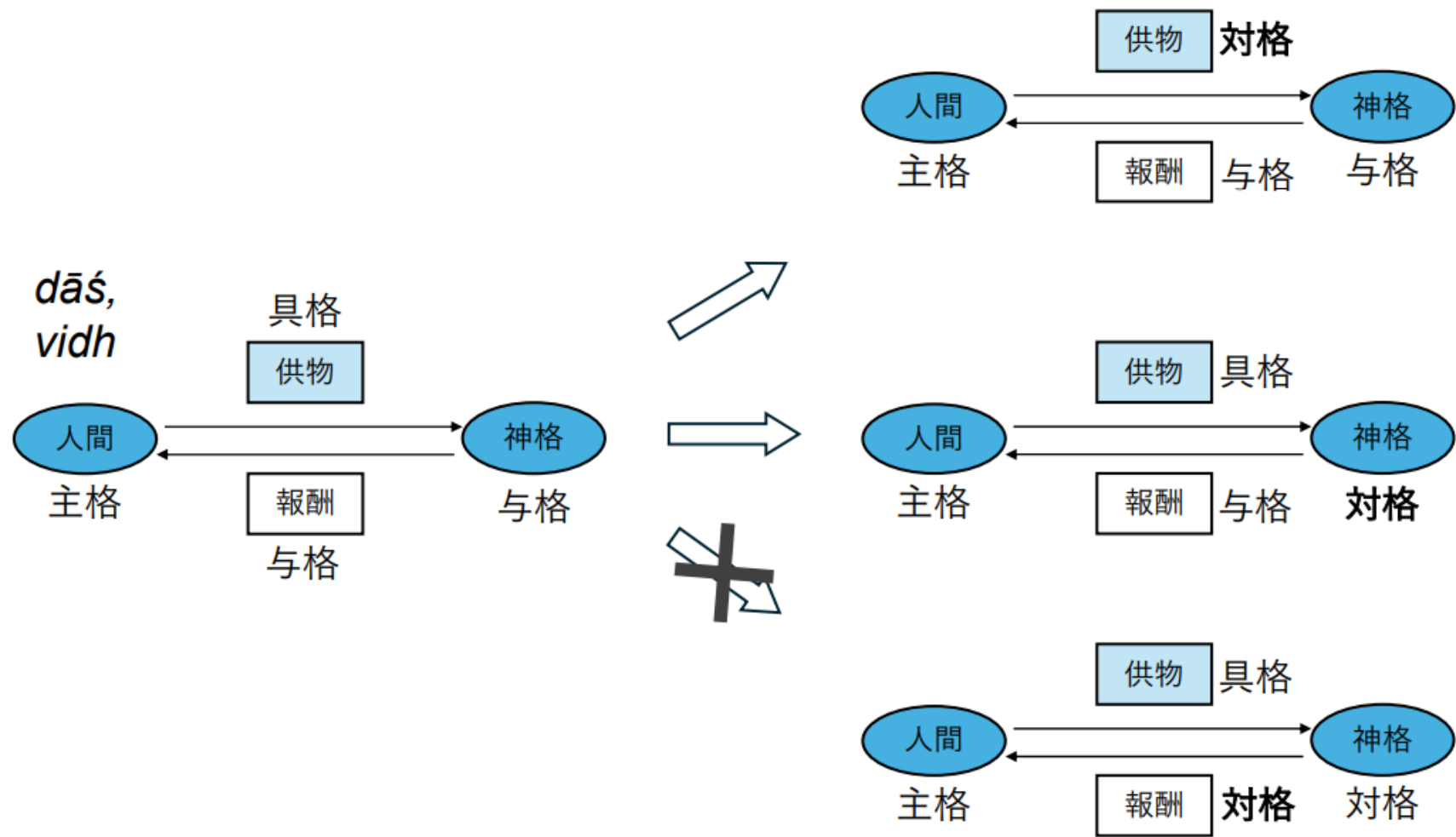
- 祭式動詞における制約：「相対頻度の低い役割は対格で実現できない」
- 主要格配列における動詞の使用状況と、上の制約から、祭式動詞の項実現の全体像を予測できる



2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)



2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)



2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【結論】

- [1] 祭式フレームを設定することで4つの格配列を特定し、格配列と動詞の関係として記述
- [2] 動詞における役割の相対頻度によって副次的にどの役割が対格になりうるかが決まり、それによって格交替の可能性が決まる

2.2.「ヴェーダ語祭式動詞の格交替に対する定量的アプローチ」(坂本)

【質疑など】 (一部抜粋)

- 今回の最古のヴェーダであるリグ・ヴェーダだけなので、より後期の文献も含めると主張を強められる
- 〈報酬〉はもともと存在するもの／しないものかによって違いがありそうだが、関係はあるか
 - 〈報酬〉の性質についてはもともと存在するものは少なく、行為名詞（無事に帰ること、安泰、など）もみられる
- 各役割の必須項性についてはどう考えているか
 - 役割の頻度によって必須項になれたりなれなかったりすると考えている

3. 次回（第172回）の言語学会

- 日程：2026年春季
- 会場：桜美林大学

(<https://ls-japan.org/taikai/plan/>)



ご清聴ありがとうございました